

## ■まいばんおたのしみですね

世界と勇者を守るため修業を積んだ女闘士マルティナ。勇者の仲間に加わり、魔導師セーニャを含めた三人で魔物討伐の旅をしていた。

魔物退治は難なく進み、行く先々で次々に人々を解放していく。

一見して順風満帆な旅路。しかし、この旅には一つ問題点があった……



【いくよセーニャさん】

「はい、勇者様♥」

「……………」

魔物の群れとの戦闘。実力が頭一つ抜けているマルティナは戦線を離れ、セーニャと勇者の連携を見守っていた。

問題——それはパーティ間の性事情だ。

マルティナより先に仲間入りしていたセーニャは、既に勇者とは男女の仲となっていたのだが……セーニャと勇者、この二人の関係、というか付き合い方が、マルティナの知る常識を少々逸脱しているのだ。

「あん♥ 勇者様、戦闘中ですよ♥ マルティナ様も見てらっしゃるのに……あつ♥」

仮想大会じみた踊り子の衣装に身を包んだセーニャが、勇者との連携技を発動。その際に勇者がセーニャにセクハラするのだが、セーニャもまんざらではなく喜んでいる。

非常識だとは思いますが……乳繰り合おうがセクハラされるのを楽しもうがイチャつきながら魔物と戦闘しようが、これぐらいならまだ見過ごせる範囲。

問題は、宿に泊まる時だ。

訓練を兼ねた魔物討伐を終え、町に戻って宿を使う。注文する部屋は二つ。ここで普通なら、男女で分けるためだと思うだろう。だが実際は……

「ではマルティナ様、失礼しますね」

「ええ……………」

マルティナと別れるセーニャ。

そう、マルティナ一人、セーニャと勇者の二人。これがこのパーティの部屋の分け方である。

セーニャと勇者が同じ部屋に泊まるのは、やはり情事のため。宿に泊まるたび、二人はこうして愛し合っているのだ。

毎晩毎晩、飽きもせず愛し合う二人。別にそれ自体が悪いわけではない。二人が幸せになるのはマルティナとしても喜ばしいことではある。が……

——あああっ♥ 勇者様っ♥ 勇者様ああっ♥  
(…………丸聞こえなのよ、まったく……！)

一体どれだけ激しい交わりをしているのか。セーニャの喘ぎやギシギシと軋む音が、壁越しにも聞こえるのだ。流石にこれは目に余る。情事を楽しむのであれば、せめて他人への配慮は必要であろう。

そう思うマルティナだが、注意にはいかない。もうこれまで再三に諫めてきたのだが、二人は全く反省せず、宿をとってはこうして繰り返しているのだ。

他人に気付かれていると知りながら情事に耽る。ここがあのだ二人の最大の問題点であった。

【夕べはお楽しみでしたね】

やはり今回も隣部屋のマルティナ意外の者にも情事が知られていた。店主には皮肉を言われ、同日に泊まった客からも憧憬、あるいは軽蔑の視線が送られる。

「……夕べ、じゃなくて毎晩なのよね……」  
「あら、またマルティナ様にも聞こえてましたの？ 恥ずかしいですわ……♥」

注意のつもりでの眩きを聞いても、一切悪びれる様子はなく嬉しそうに恥ずかしがるのみ。

(やっぱり……全然反省してない……！)

ふてぶてしさに飽きれるマルティナ。しかし、このふてぶてしさが不思議でもあった。

「……まあ、迷子に？ それは大変です、すぐに親御さんを見つけなければ。マルティナ様、すみませんがお手伝いお願いできますか？」  
「もちろんよ」

町で困っている子を見かけ、率先して話しかけて助けようとするセーニャ。

彼女は勇者がいない場では、淫らな素振りは見せない。むしろ品行方正、純粹すぎて潔癖と思う者もいるであろう聖人じみた人格である。

言葉遣いや立ち振る舞いからも見て取れる、上品で清潔な彼女の素の顔。ゆえに分からない。婚姻前に身体を許し、あまつさえ夜の情事を他人に知られることに、なぜ抵抗がないのか。恋は盲目と言うが……

◆

この日も宿をとり、またマルティナだけ別室に分かれ……そして少し経った後、女性の喘ぎ声が壁越しに伝わってくる。

やはり今宵もお楽しみなようで、昨日までと変わらぬ激しい営みを行っている。

——勇者様っ♥ ああっ♥ 勇者様あああっ♥♥  
(毎晩毎晩……もう……！)

流石に部屋の場所は考えるよう言い付け、隅の方の部屋を使わせている。そのため、他の客や店主は床や壁が軋む音が聞こえる程度だろう。

だがマルティナには声もつぶさに聞き取れてしまう。誰よりも近くで淫らな喘ぎを聞かされ……マルティナは眠れず、悶々とした夜を過ごす。

二人の情事がもたらす、もう一つの問題点。それはあまりにしつこく激しい情事であるがゆえ、それを聞かされるマルティナも発情してしまうことだ。

毎晩毎晩ギシギシバンバンと音を聞かされ続ければ、否応にも性欲を刺激される。セーニャほどではないにしろ、普段から真面目で自分に厳しいマルティナにとって二人の情事はあまりに刺激的だ。

腕を太股で挟み、もじもじと擦る。だがその程度で成人女性の性欲が消えるはずもなく、ついつい聞き耳を立ててしまう。

(全く……あの二人、いつまで……)

——あああんっ♡ 勇者様のスゴいいっ♡♡

(そ、そんなに凄いの?)

情事の際は、あの清廉潔白なセーニャのものとは思えぬ言葉が聞かされる。それが交わいの快樂と幸福、そして勇者の絶倫ぶりを伝えてくる。

——あっ♡♡ あっ♡♡ 勇者様♡♡ 勇者様あっ♡♡ わたしっ、もう………あああっ♡♡♡

(セーニャ、声がまた大きく……イクの? また激しくイキそうに……あ……っ!)

短い間隔で響く、肉と肉のぶつかる音。それと共にセーニャの嬌声が大きくなり、一気に弾ける。声の様子から、激しい肉突きにより大きな絶頂に達した……そう解釈したマルティナは想像を膨らませ、眠れぬ夜を過ごすのだった……

◆

そんな日々が続く……また今夜も同じように宿に泊まるマルティナたち。今やマルティナにとって、二人の情事を盗み聞きながら悶々とした夜を過ごすのは密かな楽しみとなりつつあるが……今日は自制するつもりだ。

というのも、生理周期の影響か、今日は妙に身体が火照るのだ。こんな状態で二人の熱烈な交わりを聞いてしまえば、頭がどうにかなるのでは、とさえ思えてくるのである。

(最近、どんどん激しくなってるようだし……また大きな声が出るようなら……今日は、注意しないと……)

独り部屋で寝転がり、心のどこかでセーニャの喘ぎが聞こえ出すのを期待するマルティナ。そして期待通り、また今宵も牝の啼き声が壁を突き通ってくる。

——あんっ♡ 勇者様♡ 今日も素敵ですわ……っ♡

(始まった……!)

声が聞こえ、つい指に力が入る。火照った身体をベッドに押し当て、無意識にシーツをきつく掴む。

——あ♥♥ また♥♥ またっ♥♥ イッ♥♥♥ あはあっまたああっ♥♥♥  
(何で……こういう時に限って、激しく……！)

いつにも増して熱い交わいのようで、開始してしばらくするとセーニャの声が何度とない絶頂を訴えてくる。あまりに熱く艶めかしい営み具合に、マルティナは注意に行こうとしていたことも忘れて聞き入ってしまう。そして遂に、二人の盛りがピークに達する。

——ああああっ♥♥♥ 中っ♥♥♥ 中にいいっ♥♥♥  
(な、中っ……！)

言葉は明らかに膣内射精を意味するものだ。まさかとは思うが、膣内射精により大きな絶頂に至ったのだろうか。その弾けるような絶頂を耳にしてマルティナは我に返り、ベッドから起き上がるとすぐに二人の部屋に向かった。

(毎晩毎晩、こっちの気も知らないで……！ しかも……中に、だなんて……！  
今日こそ、ちゃんとと言わないと……！)

バンッ！

「ちょっと！ 勇者くんっ……?!」

ドビュルルルルッ♥♥

「ああああっ♥♥♥ またっ中出しいiiiiiiiiiiiiっ♥♥♥」

ドアを開けると……そこは丁度、背面騎乗位で膣内射精されるセーニャが絶頂の声を上げる瞬間であった。清楚な印象の強いセーニャが表情を酷く蕩けさせており、絶頂のせい大きく背を弓なりに反らせている。その股間にはやはり勇者の男根が深々と突き刺さっている。

セーニャの絶頂度もさることながら、勇者の精力はそれ以上に意識を向けさせられる。セーニャよりも若く小柄で、あどけなさの残る彼のものとは思えぬ肉剛であり、毎晩絶えずセーニャを犯しているにも関わらず、人外級の射精量だ。

膣内射精は勢いが強すぎるのか、結合部からかなりの量が飛び散っている。白濁で肉根も隠され、見てすぐには肉根に気付けないほど。

そんな凄まじい絶頂と精力を目の当たりにし、注意の言葉が詰まるマルティナ。そんな彼女に、勇者が静かな声で応える。

【何？ どうかしたのマルティナさん】

「ど……どうかしたの、じゃないでしょ……！」

宿屋で、しかも旅の途中なのに……毎晩毎晩……！ 音が聞こえるのよ！ 一体いつまで……」

【ごめんごめん、ちょっとはしゃぎすぎたかな。でも、注意するのにドア開けなくてもいいよね？ もしかして、マルティナさんも混ざりたかったり？】

「なっ?! そんなわけないでしょう！ うるさくて迷惑だから、仕方無く……」

ぬぼっ♥♥

「ああんっ♥♥」

そこで勇者が肉幹を引き抜いたことで、セーニャの喘ぎが割って入る。秘部の栓が抜け、中に詰まっていた白濁がゴボリと溢れ出すと、生臭くも癖になる匂いが一層広がってマルティナの嗅覚を刺激する。

また、肉幹の全容も明らかになり……鍛え上げた錬鉄の如き雄々しさと、禍々しい形状。それが見え、またマルティナは言葉を失ってしまう。

【どうしたの？ このチンポが気になる？】

「違うわよっ、何を言って……」

【ていうか、うるさいのはさっきからだよね？ 今になってようやく注意に来るっておかしいなあ……もしかして、ずっと聞き耳立ててたんじゃないの？】

「っっ?! 誰が、そんなことを……」

この勇者はあどけない少年のくせに、妙に狡猾な部分がある。この状況下にも関わらず冷静かつ瞬時に分析し、あっさりマルティナが盗み聞きしていたことを見抜いている。

図星を突かれて焦るマルティナだが、聞き耳を立てていたことは問題ではない。落ち着いて反論しようとするが……

「……私のことはいいから、もうこんなことはこれっきり……」

「うふふ……マルティナ様、何を怒ってらっしゃいますの？」

再びセーニャが、今度は喘ぎではなく通常でマルティナを遮る。

勇者の巨根から解放され、自由となったセーニャ。彼女は肌と踊り子衣装を白濁に染めたまま、ゆっくりとマルティナの方に歩んでくる。

「ちょ、ちょっと……そんな状態で来ないでっ!」

「マルティナ様、そんなこと言って……」

無視して近寄ると、セーニャは不意にマルティナの股間に手を当てた。細長い指が的確に陰唇と陰核を布越しに触れ、日々続いた隣室情事のストレス、更に生理周期の影響で火照り切った秘部はそれだけで甘く発熱し、マルティナはヒクンと腰を振るわせて前屈みになってしまう。

「あっ?! どこを、触って……」

「本当は混ぜりたい……いえ、勇者様のおちんぼを味わいたいのでしょう♥ ほら、ちんぼ臭を嗅いで、ここはもうこんなになってますわ♥」

「やめなさいっ! 離してっ……あ……!」

肉欲にまみれた女の、情事で汚れた指。それに触れられるのは当然抵抗があるはずなのだが、なぜかマルティナは抵抗できなかった。そして甘い熱により身体の力が抜け、本来なら圧倒的に膂力の差があるというのにセーニャの細い腕を押し返せず、彼女の手技を股間に与えられ続ける。布越しに揉まれて媚熟が更に大きくなり、深く浸透して下腹部が疼くような感覚さえ抱かされる。

「認めましょう♥ わたしたちの交わり……わたしが勇者様のおちんぼで乱れるのを聞いて、マルティナ様も、混ぜりたくなったのですよ♥」

「有り得ないっ……ああっ！ やめ……触らないで……っ！」

セーニャはドアを閉め、脱力したマルティナを強引に勇者へと近付けていく。凄まじい精力を未だ保っている勇者に向けて押されるのに恐怖するが……同時に、いくら力が抜けているとはいえ、ただ発情しただけでセーニャに力負けすることにも違和感を抱く。

「セーニャ……あなた、どこにそんな力が……っ」

「あら、まだ気付きませんか？ 少し前から、食事に一服盛りさせていただいているのですわ♥」

異様なまでの体力逆転に、耳元で囁かれて答えが返る。なんとセーニャはセーニャでマルティナを見抜いて……というより、性の幸福を共有するためにか、このような事態が起きるように仕向けていたのだ。

日々の食事に媚薬を混ぜて自然と発情しやすいようにしていた。更に情事の際は媚香を焚き、近くにいるマルティナを必然的に煽りやすくしていたという。

マルティナは自身の肉体の火照り、セーニャと勇者の冷静さに不自然さを覚えていたが……この状況が、既に二人によって作られたものだったのだ。

「な……何でそんな、バカげたことをっ！」

「だって……見てください、あの勇者様の素晴らしいおちんぼ♥ ぶっとくて、硬くて、いくらでもビュービュー出して♥ とっても気持ち良くて、幸せになれるんですもの♥ あれをもっと満足させなければ、女……いえ、牝として失礼というものですわ♥ そして、わたしだけでは物足りなさそうにしていたので、つい♥」

【止めたんだけど、セーニャがどうしてもって。ま、そろそろセーニャだけじゃ『コレ』について来れなくなってきたから、ちょうどいいかなとは思ってたけど】

ただ性欲を満たすために、人一人を利用し、犠牲にすることを厭わないというのか。勇者の精力が齎す快樂は、勇者自身を含めた二人をこれほど歪めてしまうものなのか。たしかに世界平和のため、勇者の気力や精神衛生の維持は優先されるべきだが……このような方法、認められるわけがない。

「申し訳ないのですが、マルティナ様には一緒に爛れてもらいますわ♥♥」

「な……あなたたち、何を考えてるのよ……！ 正気なの？！」

「このおちんぼを味わえば、きっと心も変わるはずですよ♥ 現に、身体が言うことを聞かないのは、媚薬のせいだけではないでしょう？」

「……！」

言われ、否定できないことで肯定を表してしまう。

今のマルティナは、触れられただけで媚熱を感じてしまうほど性感が過敏になっている。ここまで敏感になっているのは、確かに媚薬の影響が大きいだろう。だが、二人の情事により興奮してしまったのは、媚薬の効果だけではない。最初は疎ましく思って注意していた情事を、いつの日か楽しみにしていたのは紛れも無くマルティナ自身の意思によるものだ。

「さあ、マルティナ様……一緒に堕ちましょう♥♥」

「っ……そ、それでも……ダメなものはダメよ！」

性欲があるのは認めざるを得ない。だが、だからといってこのような墮落に耽る必要などないはず。逡巡したものの、マルティナは髪を左右に揺らして淫行を拒否する。

【どうする？ 本気でイヤみたいけど】

「では、勝負といきましょう。一度だけ挿れていただき、おちんぼ様に屈さず拒み続けられたなら、マルティナ様の勝ち。この話はなかったということに……もっとも、いくら理性の強いマルティナ様といえど、勇者おちんぼ様には勝てっこありませんが……♥」

「だから……あっ！」

勇者の精力を一度味わうことは確定事項らしい。何が何でも性の快楽を知ってもらおうという意志の強さに押し出され、椅子に座る勇者……その強直の間近に立たされる。雄の匂いが更に立ち込め、咽返りそうになりつつも下腹部の熱が高まっていく。

「……………っ！」

(お……大きすぎよ……っ！ 精力が……見ただけで、伝わってくる……っ！)

勇者は一時、魔王の奸計によって『悪魔の子』などと呼ばれていたが……その肩書きは、今に限っては正しいかもしれない。凶悪なまでの形、精力。これはとても勇者という聖なる存在のものではない。

そんな凶悪な勃起肉に、腰を下ろせばすぐに挿入できる立ち位置。あまりに危険な事態に、理性が警鐘を響かせつつも本能が昂ぶり、ゴクリと息を吞んでしまう。

【そんなに見られるたら参るなあ～……やっぱりコレが気に入ったんだ♪】

「違うわよっ！」

「そう言って、マルティナ様も脚を開かれたままですよ♥」

「これはっ……力が抜けて……！ だから、私の意思なんかじゃ、あっ！」

「もう覚悟をお決めになって♥ それともなんですか……やはりこんな濡れ濡れおまんこでは、勇者おちんぼ様には勝てないと認めるのですね♥」

「待ちなさいあなたたち！ 勝つとか負けるとか……っ！ やめ……っ！」

セーニャがスパッツの股間部を魔力で引き裂き、媚薬発情でほぐれて濡れそぼった牝孔が露出される。更に胸を掴み、体重を乗せることでマルティナの姿勢を崩す。

どうにか踏ん張るが、蟹股のまま腰が下がって、じわじわと勇者のモノに近付いていく。

やはり今の状態では膂力でも敵わず、力尽くで挿れられてしまう。

「やめなさい！ いやっ！ ダメ……！」

(は……入る……っ！)

【いよいよだね。マルティナさんが性欲に屈服するとこ、見られるかなあ～♪】

「さあ……あの強気なマルティナ様が、勇者おちんぼ様を挿れただけで無様に負ける姿、お見せ下さいなっ♥♥」

肩に手を乗せ、強引に押し込んでくる。いよいよ挿入間近となる中……挿入が避けられないと悟ったマルティナは、好き勝手に笑う二人に対して言葉で最後の反抗を見せる。

「媚薬なんて卑劣な手を使ってまで手籠めにしようなんて見損なったわ……！  
私がっ……！ 勇者の、そんなものにつ……負けるわけないじゃないっ！  
約束よ！ それを挿れたら、すぐにこんなことやめてもらうわ！  
性欲になんて……！ 私は屈したりしないっ！」

ずぼおおっ♥♥

「っっほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお♥♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！